
TwinDareDevil

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TwinDareDevil

【Nコード】

N4106A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

TwinDareDevil。一対のイカレ野郎。

(前書き)

注意。本作は暴力的なシーンを含みます（そこまで過激な描写はないと思われますが）。苦手な方は閲覧されないことをお勧めいたします。

一駅のプラットホーム。地下鉄の深夜。冷えてのしかかる空気、わずかに人影。

男。年のころは20代の前半といったところ。少しもくたびれたところのないブラックのスーツ。ワイシャツは白く、タイは明るく垢抜けたパープルのストライプ。銀色のシャープなフレームの眼鏡。髪は軽く撫で付けてあり、染色はされていないが完璧な黒というほどでもない。

胸ポケットから薄い携帯電話を取り出した。少しの操作をし、耳に当てる。少し斜め上を向くと、締まった顎のラインが出る。造型のバランスとして秀逸だった。

「渚君。…寝ていましたか。仕事ですよ。…君がいなけりや始まらない。出てきてください」

チャッ。男は片手で器用に閉めたそれを何秒か見つめた後、また胸ポケットにしまった。

轟音とともに強い風が男の髪やスーツの裾を揺さぶる。停止する列車。男の口角が少し上がる。

「さて：おねむの坊やが来る前に少し楽しませてもらいますか」

開いたドアに、男は隙の無い足取りで歩いていった。まるで光に吸い込まれるように。

無人のビル、らしすぎるシチュエーション。

男は左手をポケットに、右手で眼鏡を直しながら階段を下りていった。ただ広い空間に、よく磨かれた靴が奏でる規則正しい音がメトロノームのように響く。アンダンテ：歩くくらいの早さ。よく言ったものだ。少しも動揺しない、平常そのもののリズム。

それが不意に止む。階段が終わったのだ。

男は見渡した。薄暗い、見慣れた景色。鉄と埃の臭い、お情け程度の照明。もう動かない機械や灰色の溜め場。そこは彼の狩場だ。今宵の獲物は静かに息を潜めているように見える：しかしこの空間のことは、彼には手に取るように、肌で感じ取ることが出来る。

「お待ちせしました。始めましょうか？」

彼の品の良い、ややテノール寄りの声がコンクリートや金属に反響する。天然のフェルマータ。その響きがすっかり空気に染み入っても、呼びかけた相手からの返事は無かった。

沈黙。

キーン。男の足元で白色の火花が散った。

男は少しも動揺せず、むしろ口は笑みの形を作る。目はレンズの反射で見えない。

続けてものすごい量の銃声。男は余裕の足取りで歩く。その間も足元や背後で火花が散るが、その歩みが侵されることは無い。

「無意味ですよ貴方がた。ここで銃は使わないほうが良い」

物陰からバラバラと何かが飛び出す。銃を構えた、がっしりとした体型の男たち。全員がサングラスとマスクをしていて、人相は見

えない。迷彩服がゲームの世界の住人のようだ。

発砲。眼鏡の男は相変わらず怯まない。しかし仕掛けない。器用に四方八方の銃弾をよけながら、それ以上のことはしない。徐々に男をとりまく円の半径が狭まっていく。

迷彩の男たちが急速に眼鏡の男に詰め寄る。眼鏡の男は少し意外そうに瞳孔を細めた。しかし背後から忍び寄った男が銃身で殴りかかるのを見越したように避け、それに続き無数の銃口が頭といわず胸といわず突きつけられても微動だにしない。生命の危機に瀕してのその余裕ぶりに、迷彩の男は不気味がった。

「一人か」

しゃがれた低い声。ヴォイスチェンジャーでも通しているのだろう、人工的な声だ。

「そろそろ来るころでしょう」

「？ 何がだ」

「私の頼もしいパートナーですよ」

無造作に眼鏡を直したその瞬間。

天井から黒い影が飛来する。直後、数人の男が呻いて後ずさった。1人の青年が低い姿勢で着地し、背後の男を見やった。

「…竜胆サン…一人で戦うな」

「ならもっと早く来てください、渚君」

竜胆と呼ばれた眼鏡の男があながち冗談ばくもなく軽口を叩く。

渚と呼ばれた、高校生か大学生くらいの青年は小さく溜息をついた。黒いパーカーにスウェットのズボン、腕まくりをして覗く腕は細く締まっている。右腕のほうが若干太い。

渚の脇を銃弾が掠める。びくりと反応すると迷彩服の男たちをじっと睨む。

「では：行きますよ」

渚が静かに頷く。さらさらしたナチュラルブラウンの髪がそれに付随した。

そしてその顔が再び前を向くとき、青年の琥珀色に近い瞳が完璧に機械のような光を放つ。竜胆が眼鏡を押さえる。

渚の体が、彼自身の支配から離れる。奇妙な浮遊感。この瞬間から、その体は竜胆の管轄下に入るのだ。

跳躍する。多少、人間離れた動き。少しも恐怖や躊躇を感じさせない足取りで迷彩服の群れの中を飛翔する。その内の一人の膝の裏に狙い済ました一蹴。よろけて低くなった頭部に向けて、続けて踵を落とす。ただの運動靴にしか見えないその靴底には金属が仕込まれている。男は顔面から地面に突きつけられる。フリーになった渚に銃弾が浴びせられた。落ち着き払った動きでそれらをすべて避け、姿勢を低くすると近くの敵の脚を払った。更にそのずっと後ろでは、竜胆がレンズの内側から冷ややかとも取れる目線を渚と迷彩の男に向けている。

渚に気を取られていた敵たちがふたたび竜胆に視線を移した。その動きを、竜胆は鼻で笑った。

「頭の回転、遅いですねえ。却って調子が狂いますよ」

竜胆の前にはすでに、彼を守るように渚が控えている。つい一瞬前まで遙か向こうにいた彼の出現に、男たちは目を疑う。

渚の瞳はガラス球のようだが静かだ。息も乱れていない。

男たちは渚に向けて一斉に銃を構える。

渚の心ばかりが恐怖で震えた。

『……どうするんだ』

『任せておけ』

現在、渚の体は渚の意志で動かない。心で微かな抗議をするが、それはにべもなく却下された。

竜胆の作戦は完璧だ。渚はそれを実行するための道具になる。そして使われながら、その真意を知ることとは出来ない。

男が発砲：しようとする。しかし発砲できたのはほんの数人。渚の脚に腕を蹴り上げられなかった者だけだ。かろうじて撃たれた数発も竜胆とは見当違いの方へ跳ね、発砲できた者も数秒後には呻いて地面に沈んだ。しかも渚の踵は丁寧にも全ての者にとどめの一撃を加えていった。これで残るは数人である。竜胆の笑みが深くなる。残った男たちも一応プロの連中らしく、あまり動揺を見せず攻撃態勢を崩さない。それらからの銃弾を避け渚が横に飛ぶ。その脚で壁を数歩駆け、敵のほうへその勢いを乗せた蹴りを加える。全く人間離れした動きだ。敵も威力もさることながらそのあり得ない動きにうろたえ、頭の回転が追いつかない様子でよろけた。渚の足はすかさず男の顎を蹴り上げ、そのまま肩に踵を落とす。まあ同じような手で、数人同じように伸す。最後のほうに一人起き上がって竜胆を襲いかけたが、渚が一瞬で距離を詰め、眉間に向かって一撃。男の粉々になったサングラスがカシャンと音を立てて落ちた。続けてショットガン、本人の順に地面と仲良くなる。

渚は、正確には渚を操る竜胆の意思是、更に男に向けて踵を何発も落とす。

男が呻いてやがて動かなくなる。渚は自分の脚で事切れようとす
る男を見ながら、苦虫を噛む様な気分を耐えた。竜胆が戦闘は終わ
ったと判断したのか、渚の体に自身の感覚が徐々に戻ってくる。

「ふっ：この程度で私に勝てると思っているのでしょうか？」

わざと最後の言葉責めをせんがために敵の息を少しだけ残してお
く。かといって口答えが出来るほどには残さない。彼のいつもの手。
演説が終わるころに事切れるように加減する。どんなに強い相手と
でも、チェックメイトまでを完璧に組み立てる。それが出来なかつ
たためしはない。

彼は惜しげもなく自らの智恵をさらけ出す。手のひらを見せたと
ころで負けるつもりなど無いという自負と、何より好きなのだ、相
手に自分の能力を見せて差し上げるのが。彼は能のある鷹だ。しか
し爪は隠さない。むしろ振りかざし、見せ付けて、小動物どもの反
応を見たがる。彼はそんな自分の性格であり大きな欠点を自覚し、
改善の余地を見出しながらも敢えて泳がせておいていた。いつかそ
れで身を滅ぼすかもしれない。：まあ、しかしそれも良い。窮地に
追いやられたら、また策を練ればよい。自分の脳味噌を過信してい
るわけではないが、最悪の状況を想定して動く最高の策士である彼
は、不思議なことに予測のつきがたい未来に関しては底抜けに楽天
的であった。いや、一度窮地に追い込まれたのかも知れない。彼
は、いや彼らは、有能すぎるゆえに生きるか死ぬかの場面に滅多に
至らない。そうなくても生き延びる自信はあるのだが。

渚は右の足に盛大にこびりついた返り血を可能なだけ振り払いな
がら、もう二度と動かない（せいぜい多少の痙攣程度）迷彩服の男
たちを見た。

「…遊びすぎだ」

「悪いね、確かに廻り過ぎた。今回あまり弱かったから」

ちつとも悪びれずに言う。渚は目を伏せて小さく溜息をついた。

「あんた…変だよ」

「そうだね。君にそう言って貰えると有難い。…いかんせん、目の前のものを潰す事に慣れると自分が絶対のように思えてきていけない」

「……」

妙な言葉の選びだが、惚れた弱み…とでも言うのだろうか、この狂った賢人を渚は見捨てることが出来ない。

「そういえば今日は満月だったな」

「……」

これだけ残酷に戦う男が、夜空を愛し、月の満ち欠けを気にする。そうだ、今日は確かに満月だった。

…ばかばかしい。

ばかばかしすぎて、笑えてくる。

これだけ血なまぐさい夜も、月がきれいに見えるなんて。

渚は自嘲した。

笑ってみて、あまり罪悪感を覚えていない自分に気がついた。

竜胆が死ねば月なんて憎くなるかもしれない。

そう思って、渚は階段を昇る竜胆の背を追った。

地上に出れば月がきれいだろう。

END

(後書き)

Thanks for Reading!

続編・番外編

N5287A 『TwindaredevilBirth』

N6907A 『TwindaredevilCross』

N4873B 『TwindaredevilAdeline』

もよろしければどうぞ。

また、作品への感想・批評をいただけますととても励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4106a/>

TwinDareDevil

2010年10月17日06時31分発行